

富士山の世界文化遺産登録

清 雲 俊 元

富士山が世界遺産に登録されるまで

富士山は、その雄大さ、気高さにより、古代から人々に深い感銘を与え、心の拠り所として親しまれてきた山である。このたびの世界文化遺産登録は、そうした富士山の美しい景観と、それぞれの時代の人々の思想や信仰により育まれてきた日本文化の象徴である富士山が世界の宝として認められたのである。

戦後の日本人は、かけがえない霊峰富士山とその価値を認めながらも、ゴミの山問題、あとを絶たない開発問題といった富士山に対する悪いイメージをなかなか払拭できなかつた。しかしこの問題も毎年継続して行われてきた清掃活動、特に平成十七年度以降に行われた山小屋の整備、バイオトイレの整備、山の崩壊防止対策などによって、富士山の環境が改善されてきたのである。

また、推薦書に掲載する構成資産は、ユネスコが定める評価基準に合わせ、慎重に検討が行われ決められた。この検討過程で最初に六六あった構成資産の候補は最終的に二十五に絞り込まれた。学術委員会の検討中に気付いたこと

は、富士山は、あまりにも有名で、世界中の人々から注目されていたため、ともすれば議論が深まらない場面も見られた。県内外の有識者から「富士山は、上滑りしているのではないか」と厳しい言葉もあった。それは富士山に対しての基礎的な学問研究が充分でないこと、県に専門の研究機関がないことも、こうした指摘の根底にあったのではないかと思われる。私たちは、平成二十年になって遅ればせながら県に対して「山梨県富士山総合学術調査研究委員会」の発足を懇願し、富士山ならびに周辺の考古、歴史、民俗、文学、自然などの各分野にわたって、県内外から、専門の研究者を招聘し緊急に調査研究を行った。

この調査研究は、平成二十四年に四年間の研究成果として、中間報告書が取りまとめられたが、この研究成果は推薦書の提出を一年早めることに寄与したと自負もしている。

一方、構成資産は、国指定の文化財であることが必要であった。ところが平成二十三年になってから、富士山は文化遺産としての登録であれば、特別名勝指定だけでなく「史跡指定」が不可欠という指摘がされた。このときはいささか驚いたが総合学術調査研究委員会の成果に助けられ、文化庁への史跡指定の申請を何とか行うことができた。平成二十三年の史跡指定には、富士山八合目以上の山体、吉田口登山道、北口本宮富士浅間神社、河口浅間神社、富士御室浅間神社それぞれの境内地が史跡の指定を受けた。また、富士五湖（山中湖、河口湖、西湖、精進湖、本栖湖）は富士山の顕著な普遍的価値の証明のためには必須の構成資産であるとされ、国の名勝指定が必要であった。このためには湖岸にかかわる三五五件の住民の同意が必要となり、これまた大変な作業となった。住民からの同意取得は困難を極め、二十五年の登録が危ぶまれ険悪な状態となった。

山梨県では知事を先頭に県職員、市町村職員が昼夜奮闘し、地元との交渉を重ね、ようやく平成二十二年十二月末

日にほぼ百パーセントの同意を得ることができ、それぞれが国の名勝指定を受け構成資産としての推薦書の記載に間に合わせたのである。この時、有形文化財でも富士吉田市の御師の住宅旧外川家も紆余曲折あったがやつのことで国の重要文化財の指定を受けることができた。こうして、専門家で構成する富士山世界文化遺産二県学術委員会で決めた二十五件の構成資産のうち山梨県分の構成資産がようやく出揃い、平成二十四年一月二十六日に推薦書を提出することができたのである。

こうした登録にかかわる様々な仕事は、行政に携わる方々の努力は勿論のことであったが、地元の関係者の理解と協力がなければ到底果たすことのできない仕事であった。

更に平成十七年以来、心配してきた問題の一つに吉田口登山道の山小屋の問題があった。吉田口登山道はスバルライン開通以来通行量が激減して、馬返から五合目に至る山小屋は経営不振となり、あるものは廃墟となり、あるものは立腐れになるなど、景観上登録に向けた足かせになりかねず、大変に危惧された。しかし、二十四年八月になって地元富士吉田市が荒廃した山小屋をきれいに撤去し関係者は一様に安堵した。

以上、学術委員会がこの七年間、文化遺産登録にかかわり、特に記憶に残っている問題を二、三拾ってみたが、今になって思えば多くの人々からの御協力によってなされた仕事であったと深く謝意を表したい。

富士山は世界文化遺産登録を達成はしたが、これから我々に課せられた問題は大きい。自然と人が、これからどう向き合って保全管理を進めていくか永遠の課題である。

富士山信仰

富士山が文化遺産として登録されたのは「信仰の対象」と「芸術の源泉」として評価された。

富士山の信仰について、その一端を考えてみたい。

遙拝の山と浅間神社

噴火及び溶岩の流れを繰り返す富士山は恐ろしく、かつ神秘的な山である。そのため富士山は古くから人々により仰ぎ見て崇拜する「遙拝」の対象として崇められた。

富士宮市の一万年前の大鹿窪遺跡、同市の四千年前の千居遺跡は富士山にかかわる祭祀・集落遺跡だといわれている。

奈良時代末期から平安時代にかけて富士山の火山活動は資料に残されているもので十数回の噴火の記録がある。

八世紀後半には富士山の噴火の様子が記事として見られるようになり、古くは富士山を「福慈神」といわれ、神はいつしか「浅間神社」と呼ぶようになった。最初に浅間神社が建立されたのは富士宮市の山宮浅間神社でその宮を大同元年（八〇六）に現在の地に移したのが「富士山本宮浅間大社」である。その後、貞観七年（八六五）になって富士山の北麓に浅間神社が建立されたのが河口浅間神社であるといわれる。富士山の麓から始まった浅間信仰はやがて全国に広まり現在一三〇〇社が存在する。

浅間神社の祭神は近世以降は木花開耶姫命で統一された女神像であるが、往古にあつては都良香が『富士山記』の

中で云っているように「仰ぎて山の峯を観るに白衣の美女二人有りて山の嶺の上に及び舞ふ云々」とあるように今日各社に伝わる木花開耶姫像とは異なり、現在南アルプス市の浅間神社に伝わる平安期の女神像（重要文化財）の姿であったと考えられる。その後、鎌倉、室町時代には忍野村忍草浅間神社、熱海市伊豆山神社に伝わる女神像の姿となり、富士講全盛期以降にあつては今日の木花開耶姫の女神像になった。

修験者の時代

富士山は奈良時代末期から平安時代にかけて十数回の噴火の記録が見られる。当時は恐ろしくかつ神秘的な山として遙拝の対象であった。永保二年（一〇八二）の噴火を最後に休止期に入ったところから修験による富士山への登拝がはじまった。修験は山岳信仰の中の宗教活動の一つで日本古来の山岳信仰が外来の密教、道教、儒教などの影響のもとに、平安時代末期に一つの宗教体系を作りあげたものである。このような修験は特定の祖師の教えに基づく宗教とは異なり、山岳修験の修行によって呪術を獲得した実践的儀礼を中心とした宗教である。

富士山修験者の最初にあげられるのは、のちに修験の開祖として崇められた役小角である。役小角は葛城山で修行した山林修行者の一人で富士山にも登拝伝説がある。『日本霊異記』によれば、六三四年大和国葛城上郡茅原村に出生した。朝鮮系の呪術者韓国連広足は小角の妖言を妬んで天皇に讒訴し、そのため小角は伊豆の大島に流刑に処せられた。小角は、昼は伊豆におり夜は富士山で修行したという。また貞観十七年（八七五）頃に著した都良香の『富士山記』に「昔役の居士といふもの有りて、其の頂に登ることを得たり」とあるので九世紀末には役小角は傑出した呪術者、修験者として伝承化されていた。

富士山をめぐる縁起や記録に名をとどめている古い修験者に伊豆国の伊豆山権現（現在の伊豆山神社）の修験があげられる。

伊豆山神社の『走湯山縁起』によると承和三年（八三六）甲斐国八代郡竹生の住人賢安（福光園寺開山）が伊豆国に赴任したとき、走湯権現の靈験を得て本地仏の千手観音像や仏堂を造営したのが同社のはじまりと伝えられている。また『伊豆国神階帳』に祭神は正一位千限大菩薩とあり、浅間大菩薩を祭神としていたことから、伊豆山権現が創立してまもなく富士山への登拝があったと考えられる。伝承では富士山への古い登拝道に「ケイアウミチ」の伝承があるが、これが賢安の登拝した道かもしれない。そのほか『本朝世紀』によれば金時（年次未詳）、賢薩（九八三）、日代（二〇五九）などが村山修験として末代上人より前に山頂に登拝している。

末代上人は伊豆山権現で修行した修験者で『本朝世紀』久安五年（一一四九）の記事によると「富士山上人」と称せられ、富士山への登拝は数百度におよび修行を繰り返した。久安五年（一一四九）に一切経を書写して富士山山頂に埋納することを発願した。そのために東海、東山両道の衆庶を勧化した。また鳥羽法皇の結縁を獲得したことが伝えられている。末代は頂上に大日堂を建立して大日如来像を造立した。浅間大神は女神像が祭神で、その本地仏大日如来像を造立するにあたり民衆から疑義が出た。

それは浅間大神の本地仏大日如来は金剛毘盧舎那仏でありすべてを総括する密教の中心仏であるので、金剛界大日如来を安置しようとしたところ、浅間大神は女神であるので胎藏界大日如来ではないかと不信をかい、末代上人はこの問題を解決するために富士山中で百日の断食行をおこない、そこで上人が悟られた。神仏は男女を超越した金胎不二の世界であることを説かれ、民衆から絶大な信頼を得た。現在も村山浅間神社に正嘉三年（一二五九）に造立した

胎藏界大日如来像が伝わっている。この像は中途改修されているが、十二世紀の末代上人の時代まで遡るといわれ、上人とかかわりがあるかも知れない。

富士山では、明治の廃仏毀釈の時代に山体にお祀りしてあった仏像や仏具が山を下っているので全体は把握できないが、富士吉田市歴史民俗博物館が調査した『富士の神仏』では胎藏界の大日如来像と不動明王が多くみられるのは富士山は女神であるので、母胎を表すといわれる胎藏界大日如来に人々の関心があつたのかも知れない。

また鎌倉時代から山頂の八つの高所を八葉の峰と称し、火口を大日如来として、胎藏界曼荼羅の中台八葉院に見立てていた。天台宗学僧仙覚の著した万葉集の注釈書に「いただきに八葉の嶺あり」とある。また江戸時代においても、富士講の全盛期に「富士山八葉九尊図」（延宝八年（一六八〇））の木版画が登拝者に配られている。これは富士講の中に密教の教えが根付いていたことではないか。

十一世紀に末代が広めた村山修験者が村山の地を拠点として大きく発展し、文保年間（一三一七～一九）には頼尊が山中の一字を村山に移し浅間神社の前身である興法寺を開いた。文明十四年（一四八二）に聖護院本山派に属した。室町時代に入ると一般の登拝者も増加し、村山三宝（辻之坊・池西坊・大鏡坊）などの修験が発達した。

富士山の山梨県側、北麓の修験者の拠点となつたのが富士山二合目の御室である。甲府盆地から古代の官道に起源する御坂峠を通つて船津口登山道に出る。御坂峠の盆地側にある行者平には堂宇があり、往古にあつては、大善寺（現在の甲州市）が祭祀を行っていた。十五世紀ごろ武田信春によって役行者像（鎌倉時代作 現大善寺所蔵）は大善寺に移されている。

二合目の御室には富士御室浅間神社を中心に円楽寺（甲府市右左口）兼帯の行者堂があり役行者像は平安時代末期

の作で現在円楽寺が所蔵している。また西念寺（時宗 富士吉田市）の子院定禪院があり、富士登拝に係る甲州側の信仰の拠点であった。円楽寺・大善寺に伝わる修験開祖と仰がれる役行者両像は全国的に見て最も古く富士山信仰として重要な尊像である。

大善寺では現在でも五月八日、寺の行者堂の前庭で「柏尾の藤切祭」と称し、役行者が大峰山で大蛇退治を行ったことになぞらえ会式を行っている。円楽寺でも明治初年まで「真木切り」と称し、全く良く似た行事が修験者によって行われていた。昔は大善寺が四月十四日、円楽寺が四月十五日に開催され、役行者が富士山へ登拝したときの「峰入りの式」として行われていたようである。特に円楽寺の富士山の行者堂では夏期には登拝者に金剛杖を施与していたことでも知られている。両寺はともに甲州を代表する修験で、甲府盆地から御坂山地、さらには富士山へと連なる回峰ルートでもあった。

富士河口湖町大嵐に所在する蓮華寺（日蓮宗）は大同山御堂寺と称する真言寺院で、背後に聳える「だんの山」（檀山、足和田山）の頂上は奥院と呼ばれ、寺伝では役行者修法の地と言われ、一帯が修験の行場であったことを伝えている。

日蓮宗（法華宗）と富士信仰

富士信仰に対する仏教諸派の中で日蓮宗（法華宗）については、富士山五合五勺の経ヶ岳の事跡が有名であるが、日蓮が法華経を讀誦し埋経した確かな史料は知られていない。また日蓮が富士山に対しての特別な位置付けもない。しかし長倉信祐氏が指摘しているように日蓮が大曼荼羅御本尊の中で天照大神、八幡大菩薩と同格の法華本門信仰の

上で守護神として千眼天王即ち千眼大菩薩富士浅間大菩薩を加えていることは日蓮自ら位置付けているとみるべきかも知れない。

また西岡芳文氏が言われる、六老僧の中の日興が富士山を中心におこなった教義「本門戒壇」の構想をみても富士山信仰の一つの流れの中で位置付けられるのではないかと思う。とくに甲州、駿州、豆州を中心に富士門流の弘通を行ってきた日興は日蓮三回忌以降その活動は頻繁にみられる。とくに日興は富士山修験として活動してきた走湯山修験や村山修験と深いつながりをもっていた。日興が天台宗であった岩本の実相寺に仕えていたころ日蓮との出会いがあり、当時の富士山修験とも交流があつて日興を介して有力な修験者が法華宗に改宗されたことも事実である。日興には本弟子といわれる日目・日華・日秀・日禪・日仙・日乘ら六人がいた。その中の日目は富士山上人といわれてきた末代が育つた走湯山にあつて第一の学匠式部僧都といわれたが日興に教化されて日目を名乗りのちに大石寺蓮華坊を開創する。日華は富士山二合目御室に行者堂を構えた真言宗修験の七覚山円樂寺で出家した修験である。日興の誕生地歟沢の蓮華寺の住僧でもあつた。沼津市岡宮の天台宗光長寺と真言修験であつた甲州市勝沼休息の立正寺は日蓮によつて改宗され両山一寺として日法が開山となる。立正寺の当時の住職宥範が日蓮と法論をかわし後に日蓮の弟子となり日乗と名乗り日興の本弟子の一人であつた。日法は駿河・甲斐に伝道し、富士山の周辺の上吉田の上行寺、木立の妙法寺・常在寺・浄蓮寺などは岡宮光長寺の末となり、富士山信仰とかかわりをもつたと考えられる。とくに、甲斐国の戦国時代の基本史料と位置づけられている『勝山記』（『妙法寺記』）の記述者が常在寺末の寺庵（法華堂）の僧らによつて書きつがれていたり、後編の作成の母体は常在寺の本寺光長寺がかかつていたことをみると日蓮宗（法華宗）と富士山信仰は無縁ではなかつた。

むしろ当時の富士山周辺の有力な修験者たちが折伏による改宗もあつたが法華経信仰に対して迎合的であつた近世にあつては当山派、本山派修験に対し小室の妙法寺、休息の立正寺、七面山にみられるように日蓮宗（法華宗）系修験が存在したとみるべきであろう。

富士講の時代

十六世紀、戦国時代の末期に現れた長谷川角行は修験者の一人で、この世と人間の生みの親は、もとのちち、はは、すなわち富士山が根本の神であるとし、江戸とその周辺の庶民の現世利益に依えて人を救う近世富士講の教義を唱えた行者である。登拝のための登山道が開かれたのもこのころで、現在伝わる大宮・村山口（富士宮市）登山道をはじめ須山口（御殿場市）、須走口（駿東郡小山町）、吉田口（富士吉田市）の登山道が開かれた。

長谷川角行は、特に関東を中心に地域の庶民の現世利益を祈り、近世富士講の基礎をつくつた。十八世紀になると、村上光清、食行身縁へとうけつがれ富士講全盛期を迎えることになる。

特に、江戸市中を中心に関東一円に富士講が蔓延したという。江戸八百八町に八百八講といわれるほどの講があり、吉田口はとくに御師の宿坊が繁栄し、全盛期には宿坊八十六軒が軒を連ねたという。

富士山の信仰は山頂を極めて登拝することは勿論であるが、とくにその間の「登拝」「富士山禪定」のような登山行為や巡礼行為が宗教的に重視された。また富士山への登山は夜明け前に山頂を目指す登山者が多い。これは山頂付近から日の出を拝むことで、十七世紀以降、道者が山頂周辺で「御来仰（仏の来迎と見なされた現象）」のちの「御来光」を拝んだことに由来した。富士山は年間、夏の二か月の間に三〇万人以上の人々が山頂をめざすが、これは近代

アルピニズムに起源するものではなく一七世紀以降の江戸を中心に関東一円に広まった富士講の登拝で、今日まで引き継がれてきたのである。

その富士講が十五、十六世紀ごろから密教思想だけでなく浄土思想が芽生え発展したのである。

山岳信仰では山そのものが神であり、仏であると信じていると共に、死者の赴く世界は西方十萬億土の浄土といながら、浄土は我々の身近にある山や森であるのだと信じておりその頂上に浄土はあると想定していた。その代表的な山として、富士山があげられたのである。

十六世紀前半の曼荼羅図に富士山本宮浅間大社が所蔵している狩野元信が描いた「富士参詣曼荼羅図」(重要文化財)にはそのことを如実に現している。

富士山への道者が湧玉池で水垢離をとり、潔斎して、村山口から山頂を目指す富士登拝の様子が描かれている。下部には東海道・清見寺・清見関・三保松原が描かれて、中間にはは大宮浅間神社(現在の富士山本宮浅間大社)・村山浅間神社、・大日堂・神楽殿などがある。村山口のその上部には中宮八幡堂・発心門・御室大日堂と思われる山内諸堂が描かれている。松明を手にした行者が列を成して山頂に向かっている様子が生き生きと描かれている。上部は三つの峰に描かれて、それぞれに仏像が描かれている。中央に阿弥陀如来、右は浅間大菩薩の本地仏大日如来、左は薬師如来であるこの曼荼羅図は、中央に阿弥陀如来を描き浄土思想を現している。甲州側の富士講の道者達は北口本宮浅間神社から馬返しまでを草山と呼び、馬返しから五合目までを木山と呼び、それから頂上までを焼山とかハゲ山といい、この砂礫地帯は神仏の世界であり、地獄または死後の世界であった。このことは富士山が浄土思想と結びつき、大日如来に変わって阿弥陀如来が安置されたのである。

富士山の世界文化遺産登録（清雲）

富士山に登拝するのには清浄な白装束を身にまとい、金剛杖を突いて「懺愧・懺悔六根清浄」と唱え、祈りながら山中に入り風穴、溶岩樹形、湖沼、湧水、滝は修業の場であった。それぞれの霊地を巡礼することによって心身を清め治病・除災など霊力を獲得し罪や穢れを消して人間は生まれかわることができる「擬死再生」の思想として富士山信仰及び儀礼が確立した。しかし明治初年の神仏分離令により山中の仏像、仏具は下山または廃棄され、神道の施設として再編されたが、富士山そのものが神であり仏であることには変わりなく、特に富士山には、いつの時代にあっても古来からの思想が根底に根深く伝わってきた。こうした富士山に対する日本人の精神性が脈々と今日に受け継がれていることがイコモスから認められ、富士山は世界文化遺産に登録されたのである。

参考文献

富士山 信仰と芸術の源（二〇〇九） ㈱小学館

「甲斐国志」第三卷

長倉信祐（二〇一五）「初期日蓮教団をめぐる富士信仰の諸問題」『日蓮仏教研究』第七号 常円寺日蓮仏教研究所
西岡芳文（二〇一〇）「富士山をめぐる中世の信仰」『興風』一二二号